



小湊陸選手

途切れぬ戦う姿勢

「日の丸」の道拓く



大牧功明選手

男子の小湊・大牧両選手、22歳以下代表候補に

関東学生ラクロスリーグ・トップリーグ(1部)の中央大学ラクロス部(男子)から、2015年シーズンの22歳以下男子日本代表候補選手2人が選出された。主将の小湊陸(こみなと・りく)選手(経4)と守備の要の大牧功明(おおまき・こうめい)選手(文4)。2人に4年間の総括とラクロスの魅力などを聞いた。



昨季の慶大戦で先取点を挙げる小湊選手

同部出身の日本代表、同候補選手は2011年(3部リーグ)の遠藤竜郎選手、2013年(2部リーグ)の中澤寛、小澤徹也両選手に続く。「日の丸」の大きな力は2014年・1部リーグへ14年ぶりに復帰した要因でもある。

「頑張った分、かえってくる」

今回の「日の丸ファイター」小湊、大牧両選手も大学からラクロスを始め、全国から35人選抜の日本代表候補入りを果たした。

入部当時は前述の2人、中澤・小澤両選手が水先案内人だった。2人を見ていると、トップレベルのプレーが分かり、自らの現在地も分かった。

多くの学生がこの競技の初心者ながら、努力次第では先輩たちのように関東選抜選手、日本代表(候補を

含む)選手にジャンプアップできる。小湊、大牧両選手が力説した。新入生歓迎の入部勧誘から、わずか1週間で、「クロス」と呼ばれるスティックを駆使してボールを投げられるようになり、相手ゴールへシュートを放つこともできる。

「目に見えてうまくなる自分が分かります。毎日が楽しかった」と大牧選手。小湊選手も呼応して「伸びしろがすごくあります。頑張った分だけ自分にかえってきます」と手応えを口にした。

自らの成長の過程は、なかなか分からないものだが、ラクロス部ではそれが分かる。

「誇れるもの」 大学で発見

小湊選手は高校まで野球をしていた。大牧選手は少年時代のレスリ

ングから始まり、中学で陸上競技のハードル、高校はバスケットボール。2人はこれまで取り組んだ競技・種目で培った身体能力をラクロスに生かしてレギュラーをつかんだ。

4年生で挑む2015年シーズン前。小湊選手は大きな変革を考えていた。

これまでのポイントゲッターは攻撃最前線のAT(アタック)と呼ばれる選手だった。相手チームからは「中央はATだけマークすればいい。MF(ミディ)がボールを持っても失点にはならないよ」といった声が漏れてきた。

発憤した小湊選手はMF、攻撃参加ができるポジションだ。変革のテーマはどこからでも得点できる中大。一人ひとりの能力や個性を結集した総合力の中大にしたかった。

残念ながらチーム成績に直結せず、「反省しています」と下を向いたが、目標達成に向けて続けた最大限の努力に価値がある。技術・戦略に加え、チームをまとめる力は高く評価されている。

胸の日の丸を「やはり、うれしかったです」と、はにかんだ。「中学・高校と野球を続けて何も誇れるようなものがなくて、大学では何か真剣に取り組みたかった。そう思っていたときラクロスの存在を知りました」

大牧選手は守備のリーダーだ。相手の突進を止める。その動きは前後左右、しかも瞬時に正確な判断を強いられる。体力勝負に加え、相手の次のプレーを読む心理戦。心身ともにフル回転する。

4年次では自らを戒め、守備陣にいったその緊張感をもたらした。個々人を強化し、組織力を高めるなどリーダーシップを大いに発揮した。

「でも、リーグ戦で勝てなかったのは、僕らが守れなかったからです。僕はケガもしてチームに迷惑をかけたしまった」

昨年5月に左脚靭帯損傷、9月には右脚骨折…。後輩へのアドバイスに「健康管理」を強調した。

日本代表に関しては、2年生で関東選抜選手となり、いずれはジャパンへと周囲が期待し、自らも「ずっと日本代表を目指していました」。日本代表候補の選考で、2度も大ケガをした選手をメンバーに加えたのは潜在能力を評価されてのことだろう。

「文武両道」 体現した2人

攻撃の小湊、守備の大牧両選手はそれぞれのポジションでさらなる向

上心を示し、チーム内外へ懸命に戦う姿勢を見せた。

学生最後のシーズンは2勝3敗の4位。1部リーグ・6チームのBクラスに終わったとはいえ、前年5位から上昇。2014年の1部昇格後はもちろん、1989年の創部以来のチーム最高成績だ。

2人は部の方針「文武両道」の実践者である。その甲斐(かい)あって希望の職に就く。

小湊選手は一部上場の建設・技術系会社「日揮」へ。今後は海外へ飛躍する可能性が高く、「日の丸」を付けた活動が始まりそうだ。大牧選手は川崎消防署(地方公務員)。市民の安全安心な暮らしを支える。気持ちは「日の丸」だ。

2人に共通するのは「頑張った分だけ自分にかえてくる」というラクロスの教えである。「ラクロス、やってよかったです」。異口同音に発した言葉から、あふれるほどの充実感が伝わってきた。



ディフェンスリーダーの大牧選手